

# 期待される教師像と期待される保育者像 その1

五十嵐 敦 子<sup>§</sup>

## はじめに

教師という職業（仕事）に人気があった時代、憧れる職業とされる時代はもはや過去のものになってしまったかもしれない。教育委員会への報告書等の提出、学力低下、学級崩壊いじめ、モンスターペアレントの登場、学習指導要領改訂による教育課程学習会など、現代の教師は、多忙というイメージが定着しつつある。

新聞などのマスコミにも、最近「多忙な教師」と固有名詞のように表現され、頻繁に登場するようになった。

多忙さに苦悩する教師生活の実態を取材し、2010年7月より朝日新聞の社会面に5回にわたり連載された「いま、先生は」は、筆者も興味深く読んだ。実際その連載に対して、「初回の朝刊が配られた直後から予想をはるかに超える反響が寄せられました。」<sup>1</sup>と、取材・連載の翌年に出版された著書『いま、先生は』（岩波書店、2011）のあとがきで、朝日新聞東京本社、社会部次長の村上が述べている。また、次のように述べて、社会と学校、そしてその中に身を置く教師の姿勢と生き方が深く関係していることを指摘している。「教師と学校をめぐるいまの状況は、単純な構図でとらえることはできません。社会のありようの困難さが映しだされているとも

---

<sup>§</sup>白鷗大学教育学部

言えます」<sup>11</sup>と。

第1章では、現代における多忙な教師の実態について、過去と比較しその相違に注目し述べる。ただし、今回は上記で紹介した『いま、先生は』を参考にする関係から、幼稚園教諭である保育者の実態は含まない。第2章では、過去の思想家たちが考えた教師像について、特にルソーとモンテッソーリという二人の教育者に限定して述べる。第3章では、幼稚園教諭（保育者）と小・中学校教諭の四人の現職教師へのインタビューから共通となる部分を見つけ出すことにより、教師側から捉えた期待される教師像を明らかにしていきたい。筆者が以前に発表した研究ノート『期待される教師像』（白鷗大学教育学部論集、2009）においては、学生のレポートを分析し、被教育者である学生側からの教師像について論じたが、本稿では、教育者側からの教師像について述べたい。

## 第1章 多忙な教師の現状

日本における教員の場合、公立私立を問わず、勤務時間は定まっていますが、定時に学校に出勤はするが、定時に学校を退勤する先生は、まず全国に殆ど存在しないといっても過言ではない。オーストラリアの公立高校に勤務し、日本語を教える日本人教員から聞いた話によると、オーストラリアの教員は、授業が終了すればすぐに、大半が学校から自宅へ帰るとのことであった。週末の土日は当然休日となるので、極端に言えば、週末アルバイトをすることも可能であるという話を聞いた。実際、私に「オーストラリアの学校の教員は、勤務時間外は働かない。」と語った知人は、近々伴侶がレストランを開店するので、週末はその店を手伝うという話をしていたことを記憶している。日本では、そのようなことは不可能であろう。さらに、日本では教員の残業手当に相当する特別手当が支給されている現状がある。

朝日新聞の連載をもとに加筆されて出版された『いま、先生は』には、

全国における教員生活の実態と苦悩が、リアルに描き出されている。目次の中で、特に注目したい項目は、1. 教壇を去る教師たち、4. 心を病むの二つのタイトルである。

「教壇を去る教師たち」では、毎年1万人以上の教員が早期退職をしているというデータが紹介されている。文科省が3年に一回実施している「学校教員統計調査」においても、教員の離職者数とその理由が発表されている。しかし、その数字には勧奨退職者(定年前に辞める)も定年退職者に含めているので、正確な数字がつかめないという理由で、朝日新聞社が独自に各地の教育委員会に依頼して調査を実施した。その結果、中途退職者の総計は、最新の2009年度は1万2732人で、全教員84万人あまりのうち、1.51%、つまり約67人に1人の割合の中途退職者がいたことが示されている。<sup>iii</sup>

注目すべき点は、早期退職者の理由についてである。文科省が外部委託して行った調査(七つ道都県公立の小・中学校1600人対象)によれば、「やりがいがある」と回答したのが9割に達している一方で、「勤務時間外での仕事が多い」と回答したのが9割、さらに「精神的な負担を感じている」と回答したのが27.5%に達していることは、多忙な教師と言われる現実を反映しているといえる。この調査について、教育社会学が専門で教員の燃え尽き(バーンアウト)度調査を行い研究する久富善之名誉教授は、二つの要因が予想されると指摘している。第一は、子ども特に保護者や同僚との関係に悩み、報告書作成などの時間に追われていること、第二は、教員評価の実施などで、教員が学校改革の標的になっていることが挙げられるという。<sup>iv</sup>

次に、早期退職した教員の一人ひとりの思いを朝日新聞社記者が取材して記録した具体的な例を紹介したい。

### 1) 生徒指導上の問題で退職した女性教員

定年まで二年を残して早期退職した女性教員は、生徒指導がうまくいかなかったことを理由として挙げているが、その背後には、保護者が昔と比較して変わってきていることがあるという。また保護者からのいろいろ

なクレームに対して、担任一人で対応するのではなく、学年全体の教員で対応するというやり方が過去においては通常であったが、今はその「チーム力」が存在していないという。またさらに自信を失くしたことが直接的なきっかけとなった。それは、校長による人事評価であった。人事評価の「学習指導」の項目で、校長からC評価（もう一步）を点けられたことである。自分の弱点はよくわかっているが、校長からの説明に納得できなかったのである。もう一つの理由は、健康に自信を失くしたこともある。健康診断の結果、「糖尿病予備軍」の判定が出たこと、多忙さが拍車をかけ、体力にも自信が無くなってしまった。<sup>v</sup>

## 2) 教壇を去ったベテラン教師夫婦

公立小学校に20年以上勤務していたベテラン教師夫婦の夫の方が、2007年に退職し、妻が一年遅れて2008年に退職した。今は、夫婦で学習塾を経営している。夫婦合わせた収入は、教員時代の10分の1に激減してしまったという。しかし、子どもが理解するために納得いくまで教えることのできる精神的な充実感を味わい始めている。

退職した一番の理由は、教育委員会に提出する報告書作り、学校統合に関する会議、学力向上のための研究会への出席などで多忙になり、「子どもと向き合う」時間がだんだんと減ってしまったことである。「教師は教壇で勝負する」という言葉を信念として教員生活を送ってきたのだが、授業の準備のための時間や子どもの話に真摯に耳を傾ける時間を確保できなくなってしまったのである。そのような精神的なストレスが抑うつ症と診断されて、休職に追い込まれてしまった。一度は復職したが、結局、うまくいかなかった。<sup>vi</sup>

「心を病む」では、精神疾患による休職者の増加が近年特に顕著であることが紹介されている。それは、次のデータで示されている。文科省の調査によれば、1999年と2009年を比較すると明らかであるが、10年で2倍近

くに病気休職者が増加している。その中でも、精神疾患による休職者が同じ10年で3倍近くに達していることが、データより理解できる。管理職から一般教諭にスライドが希望できる「希望降任制度」利用も可能で、その制度利用者も増加の傾向である。また、東京都教職員互助会・三楽病院の精神神経科は、教職員のメンタルヘルスを担当する医療機関として全国的にその名を知られている。この科を受診する教職員は、年々増加傾向にあり、1997年の89人（年間）の相談者が2009年には、507人で5倍以上に増加しているという。<sup>vii</sup>

また、三楽病院では、メンタルヘルス相談の受診ばかりではなく、休職中の教員対象の職場復帰のための訓練プログラムがあり、集団精神療法、模擬授業、レクリエーション療法、芸術療法を使って訓練を行っている。特に集団精神療法は中心的な治療法であって、語り合うことによって、自分を見つめ直すことができ治療のきっかけを作ることになる。

採用1年目で、うつ状態となり、三カ月間の自宅療養が必要との医師の診断書が下された新任教諭、ベテラン故に前年学級崩壊であったクラスを無理矢理に担任させられ、円形脱毛症になった教諭、管理職になったが故に、責任感の強い自分が仕事を能力以上に引き受けてしまい、パニック状態になり不眠症になった男性教諭らの実例が紹介されている。<sup>viii</sup>

このような現状を解決するためには、精神神経科医師の真金部長が次のような助言を行っている。

職場内で教員一人ひとりを支える態勢作りをする必要があること、保護者や地域の人々も子どもと教員を支えるべきということから、こう述べている。

「教育の責任を学校に一方的に求めるのではなく、保護者も地域住民も、学校に協力していっしょに子どもの教育を担う意識をもってほしい。」<sup>ix</sup>

このような考えは、民間人校長として著名になった元杉並区立和田中学校の藤原和博先生が地域と一体になった学校作りを提言したが、それと一致しているといえる。

## 第2章 過去の思想家たちが考えた教師像

### 1) ルソーにとっての教師像

ルソーの著書『エミール』（岩波文庫・上）の解説には、次のように述べられている。

善なる者として人間は生まれてくるが、社会が、周りの環境が人間に悪い影響を与えて「墮落させる」というのがルソーの根本思想である。同様に教育においても、ルソーの根本的な考えは変わらず、「子どもを自然の発育にまかせ、教師はただ外部からの悪い影響をふせいでやる」<sup>x</sup>こと、つまり「消極的な教育」がルソーの教育観であり、消極的教師であることが、ルソーにとっての教師像ということになる。したがって、余り早くから子どもにいろいろ教えることは避けるべきであると、繰り返し強調している。理性が十分に発達してから、いろいろなことについて説明するのが良いとも述べている。<sup>xi</sup>

ルソーは、「よい教師の資格についてはなにも語らない」<sup>xii</sup>と言いながらも、「一般の意見に反して、子どもの教師は若くなければならぬ、賢明な人であれば、できるだけ若いほうがいい」<sup>xiii</sup>と言い、「できれば教師自身が子どもであれば」と極論まで述べている。つまり、若い教師あるいは若い気持ちを持ち合わせている教師ならば、一緒に行動を共にしながら、子どもの気持ちに寄り添いながら信頼関係を得ることができるので、そのような関係を築くことが望ましいとルソーは考えたと理解できる。現職教師の言葉にあるように、私たち教師は子どもたちの「伴走者」であるという表現と一致すると思われる。

### 2) モンテッソーリにとっての教師像

モンテッソーリも、ルソーと同じように、消極的教師であることを望んでいるのであり、次の文章でそれが明らかとなる。

「教師は忍耐強く子どもたちに期待しつつ、沈黙を守り、受動的な態度を

取りつづけなければなりません。』<sup>xiv</sup>

「経験豊富な教師は、自分が背景に退いて子どもたちを自由にさせる前に、一定期間、注意深く振る舞うからです。子どもたちを消極的な意味で訓練します。消極的な意味とはつまり、子どもたちの無秩序な動きを抑制するという意味です。』<sup>xv</sup>

「上手な医者も、教師も同様ですが、人間として優れているのです。機械的に薬を投与する人でも、教育法を適用する人でもありません。』<sup>xvi</sup>

忍耐強く子どもを見守る、消極的な教師そして人間性を重視するモンテッソーリの教師像が理解できる。

とりわけ、モンテッソーリは、自分で間違いを訂正できるという自己教育を確立することが教育の第一目的であると考えた。

### 第3章 現職教師へのインタビューより

三人の現職教師と一人の教師経験者に、インタビューを行なった。教員側の教師観及び教師像を探り出すことを目的とした。

以下の項目が質問内容である。

1. 何故、教員を目指したか。教師志望の動機は何か。
2. 教員としての仕事にやりがいを感じるのは、どういう時か。  
今までに一番やりがいを感じたのは、どういうことか。
3. 教員としての仕事の中で、一番苦労した（している）ことは何か。
4. 教員としても仕事の中で、一番嬉しかったことは何か。
5. 教師として、一番大切にしていることは何か。大切にしている言葉や座右の銘があるか。

#### A) 国立小学校元教諭 Y先生

Y先生は、24年間公立小学校に勤務して、管理職になることに抵抗があるという理由で昨年春に依願退職して他の職業へ転身した方である。現在

も教育関係の仕事に従事している。

1. 小学校1年生の時の担任であった女性教師との出会いがきっかけであり、影響を受けたと思う。楽しい先生だったけれど、厳しい時もあったと記憶している。一番印象に残っていることは、給食を好きなだけお代わりさせてもらったことが鮮明である。都内にある比較的新しい小学校だった。一人一鉢運動があり、それを一生懸命やったことを記憶している。高校時代はラグビーに夢中で過ごしていたので、漠然と体育科教員になろうと考え、国立大学の教員養成課程に進学した。3年次に3週間の教育実習を大学附属小学校で行い、それが教師になることを強く決定づけた。6年生のクラスの担当になり、本当に楽しかった。クラスの子どもたちからも、「先生は、僕たちと一緒に楽しんでいるね。先生に向いているね。」と言われた。
2. 子どもたちが変わる瞬間に立ち会えること、成長のプロセスを見ることができるとに、やりがいを見出す。  
就職して3年目の時、3年生の担任をした。その時のクラスにとび箱など器械体操が特に苦手な男子がいた。一生懸命教えた結果、その子が側転までできるようになったことが、今でも忘れられない思い出であるという。
3. 在職24年間の中で、一度だけ保護者からのクレームがあった。その時が、一番苦労した。1年生の担任をしていた時に、40日間の研修期間があり、学校を留守にしていた。その間、子ども同士のけんかがあり、それをきっかけに、保護者から、「自分の子どもを見てくれていない」というクレーム（訴え）があった。その子どもの家庭には、家庭内の問題が潜んでいたことが後日判明した。この時は、我儘を言い、進級時にこの子どもの担任からはずして貰った。
4. 子どもと思いが通じた時、一番嬉しい。特に思い出深いことは、附属中学校に全員合格した年、私立中学校へ進学を希望していた4人の子どもたちを、受験の前日に「結果を恐れずに」と言葉をかけて握手し



て励ました。翌日出勤すると、その子たちからのメッセージが教卓の引き出しに入っていた。彼らと心が通じ合ったと実感できた瞬間だった。

5. 自分が失敗した時には、素直に認めること、誠意を持って子どもと関わることを大切にしていた。先生が成長しないと、子どもを教えることはできない。「子どもたちから学ぶ」ということが真理だと言う。

## B) 公立小学校教諭2年目H先生

1. 大学は、国立大学の小学校教員養成課程に進学したが、その時点では、絶対教員になりたいという強い気持ちはまだ無かった。その後教育実習で大学の附属小学校に行き、5年生のクラスを担当したことが、教師志望の強い動機となった。
2. 自分が頑張っただけ、子どもから反応があることにやりがいを感じる。自分が指導してきたことが担任クラスの子どもたちに通じた時に、やりがいを感じた。いつも子どもたちには自分で考えて自主的に行動できるように指導しているが、先週風邪で学校を休んだ時のエピソードについて、語ってくれた。数人の男子がリードして給食を完食したと報告してくれた。給食の時に、「先生にいつも残さないようにしようと言われているので、それぞれの食管の担当を決めて完食しよう」とクラスの子どもたちに呼び掛けて、実際に実行した。そのことを子どもたちがH先生に報告してくれた時は、本当に嬉しかったと言う。また、学年がスタートする時に学級経営方針（こういうクラスにしよう）を子どもたちに伝えてあるが、欠勤した時、男子児童二人が黒板に今日の予定を板書して、先生がいつも指導するのと同じように指示を出したそうである。またそれに対してクラスの児童全員が宿題や自主勉強の約束を守ってやって来たことが報告されて、感動した。2学期後半くらいから、クラスの団結が出てきたように感じる。
3. 同じ5学年の男性教諭のクラスでいじめ問題が発生したことにより、

学年全体で対応することになったため、自分のクラスの児童たちに自習にさせた。いじめが起きたクラスの子どもたち一人ひとりとの面談などや管理職や主任、養護教諭を含めた学年会議に追われて、毎日夜10時から11時くらいまで学校に残るなどしてその保護者対応に四苦八苦した。1カ月間は、ストレスで胃が痛く、食欲も減退して数キロ体重が減ったなどあり、本当に苦しかった。いじめがあったと主張する子ども一人対クラスの他の子どもたちという関係があった。保護者から、いじめがあったとされる子どもの名前が具体的に上がる度に、その子どもを呼び出して事情徴収するなど、非常に多忙で身体的にもきつかった。訴えを起こしている保護者が学校に夜9時に来て、それに対応したこともあった。

4. 新任教諭となって、1年間が経過した時、1年目の最後のクラスで、子どもたちから手紙を貰った。「先生のクラスで、1年間楽しかった。」「先生のお陰で算数がわかるようになった。」と言われたことがとても嬉しかった。また、保護者会においても、母親から、「このクラスが楽しかったと子どもが言っていました。」と言われた。
5. 新任教員として初めての小学校の校長先生から、「わが教師十戒」（毛涯章平）という文章を渡されたという。その十項目の中の、特に四項目をH先生は、重視しているという。その四項目とは、次の通りである。①近くに来て自分をとりまく子どもたちの、その輪の外にいる子に目をむけてやれ。②暇をつくっては遊んでやれ。そこに本当の子どもが見えてくる。③教師の力以上に、子どもは伸びない。精進をおこたるな。④子どもに素直にあやまれる教師であれ。過ちは、こちらにもある。

### C) 私立幼稚園教諭 Y先生

Y先生は、幼稚園教諭免許を取得後、4年間私立幼稚園で教諭として勤務し、結婚を機に退職した。その後は、主婦業の傍ら、音楽教室の講師とし

て働いていたが、7年前に幼稚園教諭に復帰して、担任は持たないフリーの先生をしている。現在は、保育や新任教諭への指導や援助ばかりでなく、事務的な仕事も任されている。

1. 高校時代、音楽教室の講師になりたいと漠然と考えていたが、担任から幼児教育学科の受験を薦められ、進学した。在学中に幼稚園実習に行き、「楽しさ」を実感した。その気持ちが強かったので、私立幼稚園の採用試験を受け、音楽が得意であることがアピールとなり、内定を得た。
2. 何もわからない子どもたちが変わっていく、成長していく姿を1年間見られるという喜びとやりがいがあると同時に責任が大きい職業であると思う。怪我があることも怖いし、神経を使う。年間を通して行事も多いことも大変だと思うが、行事を無事終えた時に充実感や満足感は大きい。
3. 直接的に関わったのではないが、他の先生がモンスターペアレント問題で苦勞するのを傍で見ている。父母の質が昔と比べて変化している。まず最初に担任の先生に相談するなど段階を経ながら進むのではなく、教育委員会に直接訴えるなど一足跳びに行動してしまう傾向がある。家庭訪問に行っても、昔の保護者は教師に対する対応が違ったと思う。幼稚園で、ある園児が故意ではなく、他の子にぶつかりその反動で手をつき骨折してしまった。病院の救急外来で診察してもらっているが、自分の子どもを怪我させたのに、相手の親が謝りに来ないと文句を言ってきた。一方で保護者の一部が、苦勞している先生に手紙を書いて励ましてくれたという。保護者対応に時間が取られるようになったのは、時代の変化である。
4. 未就園児クラス(2歳児)の子どもと関わる中でのエピソードである。トイレトレーニング中の子どもが、トイレに行くたびに泣いていたが3~4ヶ月かかってようやくトイレで用がたせるようになった。その出来た瞬間のことを、お迎えに来たお母さんに詳しくお話した

ところ、二人で感激して泣いたことが嬉しかった。また、昔の教え子が園児の父母になり、二世代に亘って教えることができるということが嬉しい。

長い間教師を続けていることで経験できる幸せである。

5. 教師としての誇り（プライド）を大事にしたい。「先生」という立場を常に忘れないように心がけている。自信が持てるように常に勉強したいと思う。また、相手や上司が求めているものを常に考えて仕事をしているという。

#### D) 公立中学校教諭 K先生

K先生は、現在公立中学校（大規模校）で3学年の担任をし、社会科を教えている。部活動では、野球部の指導をしている、教員歴12年目の男性教諭である。教員として採用されるまでは、3年間塾の講師を勤めた経験を持つ。大学在学中は、経営学部で学びながら、教職を取得した。

1. 中学校在学の時、思いがけなく野球部の部長に選出された。このことで自分の気持ちが変わり、人生観が変わった。野球の指導を通して、地域の教育界に恩返しをしたいと思い、教師を志望した。その気持ちは現在も変わっていない。
2. 毎日、生徒のために授業や部活動、クラス運営の準備をしている時にやりがいを感じる。また、卒業生が進学や就職を決めて報告に来てくれた時は嬉しいし、教師を続けていて良かったというやりがいを感じる。
3. 中学校という年齢的な難しさもあって、生徒指導に苦勞することが多い。周りの教師の中には、自分の悩みを抱え込んでしまって学校を休みがちになる教師や主任教諭との関係が上手くいかなくて2年間休職した教師、他人と話が上手くできない不適格教師がいるという現実であるという。また、保護者との関係に一番気を使っていて、保護者に「熱心で信頼できる教師である」と思ってもらえるように努力している

という。保護者には「あの先生は、信用できない」と思われないうように、よき理解者になってもらうよう心がけている。

4. 部活動や学校行事などで生徒が本気の表情で活動し、終わった時の最高の笑顔を見せる時が、教師として一番嬉しい。
5. 「学校とは夢を与えるところである」という言葉を大切にしている。また、常に子どもに献身的愛情を注ぐことを大切にしたい。

## まとめ

本稿では、紙面と時間の関係で、幼稚園教諭（保育者）の教師観と教師像さらにはそこから導き出すことのできる保育観（教育観）を十分に議論できなかったが、現職の保育者へのインタビューを継続することによりまとめ、次稿に論じたい。

筆者は、勤務する大学で「教師論」を担当しているが、毎年の受講生に「今まで出会った教師の中で、尊敬できるまたは印象深い先生について論じなさい」というテーマでレポートを提出することを課題として与えている。尊敬できる理由をできるだけ客観的に論じることを強調している。自分の考えを文章化することによって、理想的な教師像（自分はどのような教師を目指すのか）がより具体的に見出すことができると筆者は考える。同様に、桜美林大学で授業「教職入門」を担当する野坂氏の研究によれば、教室外学習の課題として与える、「これまで出会った最も印象深い先生」について受講生に授業内で紹介させることによって、次回の授業で「教師像」（教師の仕事内容、役割、求められる力、もの）を検討させるための材料としているという。<sup>xvii</sup>その研究における注目すべき結果であるが、「印象深い先生」に出会った時期として高校時代の教員を挙げる受講生は約5割にもなった。さらに高校時代の教員を挙げた受講生のうちの約9割が部活動顧問であった教員を印象深い先生としてあげている。その理由として、野坂は「教員を身近に感じる」<sup>xviii</sup>ことが大きいと指摘している。それに対し

て「幼稚園時代の先生をあげた学生は皆無である」<sup>xx</sup>と報告されている。その理由として、幼稚園への通園経験がない、その頃の記憶が不確かである、高校時代は記憶に新しいということが大きいといえるとしている。その後授業において、学校階梯別の教師像について話し合うグループワークを行った。幼稚園の教師像を担当したグループが二つあったが、そのグループからは、教師像が最も描きにくかったのが幼稚園教諭であるとの回答があったと、野坂は報告している。

つまり、上記のような理由で、保育者（幼稚園教諭）像がイメージしにくいという傾向があることがわかる。次稿は「保育者像」を導き出したい。

最後に、『子どもにかかわる仕事』（岩波ジュニア新書、2011）の中に登場する教師の言葉を引用して、本稿を締めくくりたい。

保育士となって35年になる井桁先生からのメッセージである。

保育士はどんな仕事かと尋ねられると、こう答える。

「おもしろくて、得をする職業です」と。

「人が成長していく様子を目の当たりにできるおもしろさ」

「一人として同じ人間には出会わないことです。つまり、出会った子どもの数だけ、学びの機会がある」<sup>xx</sup>

2011年3月まで公立小学校に勤務した女性教諭、渡辺先生からのメッセージである。

教師になりたての頃は、先生の仕事は、「教え導くこと」であると考えていた。

いつの頃からか、教師は「子どもの伴走者」<sup>xxi</sup>であると考えようになった。

失敗が数多くあったけれど、自分自身も出会う人たち、子どもたちやその保護者、同僚らと一緒に歩いて貰いながら、特に子どもたちの生きるエネルギーに励まされて「教師として育てられてきた」<sup>xxii</sup>と実感している。

どの教師も、子どもと同じ目線を持っていること、さらに自分の言動や授業を振り返る「謙虚な姿勢」を持つということが期待されているのであ

る。

- 
- i 朝日新聞教育チーム『いま、先生は』岩波書店、2010、p.189  
 当時の連載記事（2010年7月19～23日）の見出しを見ると、これが現実なのかと暗い気持ちになる。見出しは、「孤立 命絶った教師 苦悩二四歳 同僚は救えず」「四九歳熱血教師 力尽きた」など、衝撃的な内容が続く。当時の連載記事は、朝日新聞社の配信サイト内のweb新書コーナーで購入及び閲覧することができる。  
 本書のはしがきでは、教師の忙しさは昔からであるという指摘もある。昭和30年頃、教育学者、宗像誠也による、「忙しすぎる教師」との記述があると述べている。記者たちの取材によれば、忙しさの質の変化があると指摘する。現場の教師の表現を借りれば、現在の忙しさは、消耗する忙しさである。「子どもを指導するやりがいのある忙しさではなく、説明責任を果たすための書類作りやダラダラした職員会議に追われる忙しさ」に変化しているという。
- ii 同上、p.189  
 iii 同上、p.2～3  
 iv 同上、p.3～4  
 v 同上、p.8～11  
 vi 同上、p.22～6  
 vii 同上、p.99  
 viii 同上、p.93～4  
 ix 同上、p.103  
 x ルソー著、今野一雄訳『エミール』（上）岩波文庫、1962、p.7  
 xi 同上  
 xii 同上、p.63  
 xiii 同上、p.63  
 xiv モンテッソーリ著、中村勇訳『子どもの精神』日本モンテッソーリ教育総合研究所、p.296  
 xv 同上、p.296  
 xvi 同上、p.302  
 xvii 野坂尊子「幼稚園教諭養成向けの『教職入門』のあり方の検討—本学教職希望学生がもつ「教師像」から—」（2008年度 Obirin Today 教育の現場から）p.178  
 xviii 同上、p.177  
 xix 同上、p.180  
 筆者が分析した学生のレポートには、「幼稚園の先生に憧れて、教員を志望した」という学生も少数はいたと記憶している。したがって、学生の専攻によっても結果が変化すると思われる。

五十嵐 敦 子

xx 汐見稔幸編『子どもにかかわる仕事』岩波ジュニア新書、2011、p.39～40

xxi 同上、p.66

xxii 同上、p.66

## 謝辞

本研究の為に、お忙しい中休日を返上して、インタビューにお付き合い頂きました諸先生方に深く感謝申し上げます。本当に有難うございました。ご本人の了解を得て掲載させて頂いております。また記載されておりますイニシャルは仮名になっております。